

道徳の教科化に対する教師・保育者及び学生の認識（２）

—テキストマイニングを用いた分析—

* 越中 康治・** 目久田純一

Opinions on the Introduction of Moral Education as “Special Subject” (2):
Analysis with Text Mining

ETCHU Koji and MEKUTA Jun-ichi

要 旨

本研究の目的は、現場の教師や将来教員を目指している学生たちが道徳の教科化を好ましいと感じているか否かについて、理由づけを検討することであった。前報では、教育学部生、保育者、小学校教員、中学校教員及び高等学校教員を対象として質問紙調査を実施し、①道徳の教科化、②道徳に検定教科書を導入すること、③道徳で評価を行うことのそれぞれについて、好ましいと思うか否かを尋ねた。本報では、前報で取り扱うことのできなかったこれらの理由づけの自由記述をテキストマイニングにより分析した。その結果、まず、道徳の教科化に関してネガティブな認識が示される要因のひとつが評価の導入であることが確認された。また、検定教科書や評価の導入を肯定する理由づけにおいて特徴的であったのは「教科になれば必要だから」という消極的な理由であった。特に評価に関しては、導入すること自体に積極的な意義を見出した回答はほとんど見られなかった。教科化のための検定教科書導入、教科化のための評価といった認識が、道徳の教科化に対する抵抗感をさらに強めるひとつの要因となっている可能性が示唆された。

Key words：道徳の教科化、特別の教科道徳、検定教科書、評価、テキストマイニング

1. 問題と目的

前報（越中，2016）では、現場の教師や将来教員を目指している学生たちが道徳の教科化についてどのように認識しているのかを探索的に検討した。具体的には、教育学部生、保育者、小学校教員、中学校教員及び高等学校教員を対象として質問紙調査を実施し、①道徳の教科化、②道徳に検定教科書を導入すること、③道徳で評価を行うことのそれぞれについて、好ましいと思うか否かを尋ねた。また、現職者の一部に対しては、①～③のそれぞれについて知っているか否かを尋ね、知っているか否かと好ましいと思うかの判断と

の間にどのような関係があるかを探った。

その結果、第1に、道徳の教科化をめぐることは、そもそも知っているか否かにばらつきがあるということが明らかとなった。教科化の当事者とも言える小学校教員及び中学校教員においては9割近くが教科化そのものを知っており、また、道徳で評価を行うことについても知っているとは回答した。しかしながら、検定教科書の導入に関しては、小学校教員及び中学校教員においても3割程度が聞いたことはあるがよくわからない状態にあった。また、保育者や高等学校教員においては、検定教科書の導入や評価を行うことのみならず、そもそも道徳の教科化自体について知らない、あるい

* 学校教育講座

** 梅花女子大学心理こども学部

はよくわからない状態にある可能性が示唆された。

第2に、道徳の教科化をめぐる好ましさの認識も多様であるものの、特に当事者とも言える小学校教員及び中学校教員においてネガティブな評価が示されていることが明らかとなった。小学校教員及び中学校教員においては、教科化を好ましいとする者は2割に満たず、評価を行うことを好ましいとする者は1割にも満たなかった。他方、教育学部生及び保育者・高等学校教員においては、小学校教員や中学校教員ほどネガティブな評価は示されなかったが、その理由は、そもそも道徳の教科化に関してよくわかっていないからである可能性が示唆された。

前報(越中, 2016)では、上述の通り、道徳の教科化について、現場の教師や将来教員を目指している学生たちが好ましいと思っているか否かを中心に検討した。しかしながら、紙幅の都合もあり、その理由を検討するまでには至らなかった。本報では、前報で扱いきれなかった理由づけを分析・検討することを主たる目的とする。

なお、教師や学生から得られた自由記述についてはそれなりの分量があるため、客観的に全体的な傾向を把握しようとするのはなかなか困難である。また、要約しようにも恣意的・主観的な解釈となってしまう危険性からは逃れ難い。そこで、このたびの分析では、こうした危険性を可能な限り回避すべく、「計量テキスト分析」または「テキストマイニング」と呼ばれる手法を用いることとした。日本語テキスト型データの分析に適したシステムとして立命館大学の樋口耕一氏が作製・公開しているフリーソフト KH Coder を使用して、テキストから自動的に語を取り出し、頻出語を確認した上でそれらの語の出現パターンの組み合わせなどを探ることを通して、恣意的になりやすい手作業を極力廃して自由記述を分析・要約することを試みた。

2. 方法

(1) 調査協力者

前報(越中, 2016)で対象となった教育学部生(以下、学生)170名(男性66名、女性104名)と現職者151名の自由記述を分析の対象とした。現職者の内訳は保育者29名(男性0名、女性29名)、小学校教員73名(男性30名、女性43名)、中学校教員35名(男性16名、女性19

名)、高等学校教員14名(男性10名、女性4名)であった。なお、本報では、個々の記述に当たる場合を除いて、これらを一括して現職者の自由記述として扱う。

(2) 調査内容

前報(越中, 2016)では、①道徳の教科化、②道徳に検定教科書を導入すること、③道徳で評価を行うことのそれぞれについて、「5. 非常に好ましい」「4. 好ましい」「3. どちらとも言えない」「2. 好ましくない」「1. 非常に好ましくない」からひとつを選択するよう求めた結果を分析した。本報では、この質問紙調査において、①～③の選択の後にそれぞれの理由づけを求めた結果を分析する。

3. 結果

理由づけの分析にあたっては、樋口(2004)を参考に、KH Coder (Ver. 2.00f)を使用した。なお、最終的な分析には、協議の上で出現数20以上の語を用いることとした。

(1) 前処理、複合語の検出及び語の取捨選択

まず、①道徳の教科化、②道徳に検定教科書を導入すること、③道徳で評価を行うことのそれぞれが好ましいか否かに関する理由づけ(自由記述)について、学生170名、現職者151名、計321名のデータを分析対象ファイルとして前処理を実行した。文章の単純集計の結果、①では785、②では723、③では820の文が確認された。総抽出語数(分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数)は、①で11,664、②で8,840、③で11,085であった。また、異なり語数(何種類の語が含まれていたかを示す数)は、①で4,671、②で3,594、③で4,461であった。さらに、助詞や助動詞など、どのような文章にでもあらわれる一般的な語が除外され、分析に使用される語として、①で1,114語(異なり語数879)、②で974語(異なり語数762)、③で1,111語(異なり語数860)が抽出された。

次に、KH Coderに同梱された茶釜(ChaSen)を利用して複合語の検出を行った。その結果を踏まえ、検出された複合語のうち①～③のそれぞれで出現数が20以上であった語について、分析に使用する語の取捨選択において強制抽出する語に指定することとした。①

では「教科化」（出現数91）と「子どもたち」（出現数 21）が、②では「検定教科書」（出現数41）がその対象 となった。③では該当する複合語は皆無であった。

Table 1 道徳の教科化、検定教科書の導入及び評価に関する好ましさの理由づけにおける頻出語（上位50語）

順位	道徳の教科化について		道徳に検定教科書を 導入することについて		道徳で評価を行うことについて	
	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1	思う	215	思う	184	評価	383
2	道徳	203	教科書	97	思う	235
3	評価	109	道徳	91	道徳	132
4	考える	98	考える	58	人	68
5	教科	95	内容	47	考え	59
6	教科化	94	検定教科書	45	難しい	57
7	必要	57	子ども	41	考える	53
8	授業	55	必要	36	子ども	49
9	時間	53	良い	35	考え方	46
10	教える	48	価値	34	基準	39
11	教育	40	教材	32	良い	38
12	考え	38	検定	31	教科	32
13	子ども	37	教える	30	それぞれ	31
14	自分	36	授業	30	教師	29
15	人	36	考え	25	価値	28
16	価値	34	国	25	自分	28
17	学ぶ	31	副読本	23	正解	26
18	学校	31	学校	21	必要	26
19	指導	30	使う	21	違う	24
20	感じる	24	教科	20	正しい	24
21	難しい	24	導入	20	悪い	23
22	今	23	分かる	20	人間	23
23	生活	23	教師	19	分かる	22
24	大切	23	人	19	行う	21
25	好ましい	22	ある程度	18	心	21
26	子どもたち	22	教育	18	感じる	20
27	身	22	考え方	17	児童	19
28	良い	22	指導	17	個人	18
29	分かる	21	感じる	16	好ましい	17
30	行う	19	使用	15	道徳的	17
31	内容	19	好ましい	14	行動	16
32	教師	18	基準	13	答え	16
33	道徳的	17	行う	13	判断	16
34	確保	16	資料	13	異なる	14
35	考え方	16	選ぶ	13	記述	14
36	人間	15	大切	13	指導	14
37	違う	14	題材	13	生徒	14
38	家庭	14	学ぶ	12	授業	13
39	機会	14	今	12	先生	13
40	社会	14	実態	11	子	12
41	正しい	14	地域	11	子供	12
42	他	14	扱う	10	否定	12
43	増える	13	押しつける	10	疑問	11
44	子供	12	自分	10	持つ	11
45	心	12	先生	10	自身	11
46	時数	11	統一	10	書く	11
47	生きる	11	様々	10	部分	11
48	多い	11	理解	10	変わる	11
49	それぞれ	10	クラス	9	方法	11
50	意識（他 9 語）	10	可能（他 3 語）	9	決める（他 6 語）	10

①～③のそれぞれにおける頻出語のうち上位50語とその出現回数を Table 1 に示す。なお、これ以降の分析のために、KH Coder の外部変数と見出しのコマンドを用いて、「回答者の立場」(学生、現職者)と「回答者の好ましさの選択」(肯定、中立、否定)を外部変数として設定した。なお、「肯定」は「5. 非常に好ましい」か「4. 好ましい」、中立は「3. どちらとも言えない」、否定は「2. 好ましくない」か「1. 非常に好ましくない」を選択した際の理由づけであることを意味する。

(2) 階層的クラスター分析

①～③のそれぞれについて、出現パターンの似通った語の組み合わせにどのようなものがあつたのかを探索するために、KH Coder のコマンドを用いて、階層的クラスター分析(最小出現数20、方法: Ward 法、距離: Jaccard)を行い、デンドログラム(樹形図)を作成した。さらに、KH Coder の KWIC コンコーダンスのコマンドを用いて、これらの語がどのように用いられているのか文脈を探った結果を以下に記す。

①道徳の教科化について ①道徳の教科化について好ましいと思うか否かの理由づけに関する階層的クラスター分析の結果を Figure 1 に示す。個々のクラ

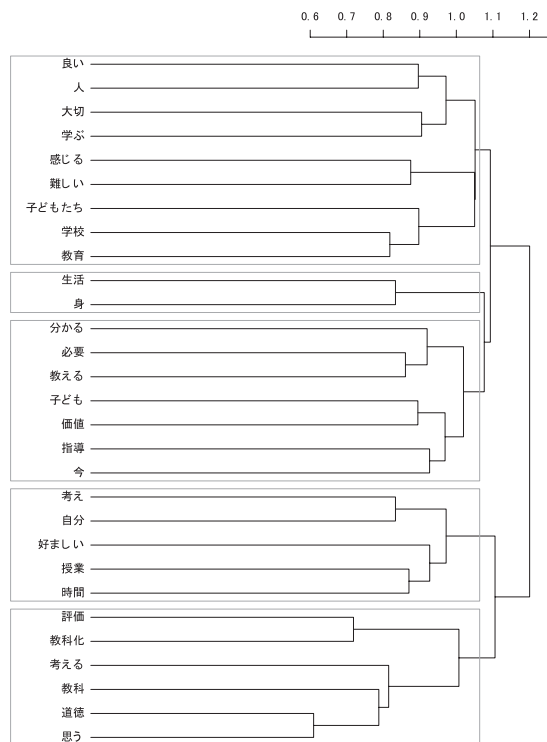


Figure 1 道徳の教科化についての階層的クラスター分析

スターについて上から順に概観すると、第1のクラスターは、「良い」「人」「大切」「学ぶ」「感じる」「難しい」「子どもたち」「学校」「教育」の語のまとまりであつた。これらの語は、それぞれ様々な文脈で用いられていた。例えば、道徳の教科化について「人として生きていくために、とても大切なものだと思うけれど…」(学生・中立)という理由づけがある一方で、「道徳は人格的な部分に関わることであり、何を良いと考えるかは人によって異なると思う。個人のそれぞれの思想を教師が評価するべきではないと思う」(学生・否定)という意見や、「学校教育の中だけで育つものではないと思う。それが教科として必要になってしまった社会、現在の日本の状況から、教科化は良かったと思う」(学生・肯定)という意見も見られた。現職の教員においても、「学校教育の中でみんなで学び合うことはいいことだ」(高等学校教員・肯定)という肯定的な意見から、「教科となると評価が伴い、評価することの難しさを感じてしまう」(小学校教員・否定)などの否定的な意見もあつた。このクラスターの語は肯定・中立・否定のそれぞれにおいて多様な文脈で使われており、要約が困難であつた。

第2のクラスターは、「生活」「身」のまとまりであつた。これらの語のまとまりは第1クラスターに比して解釈しやすく、一貫して、道徳が生活の中で身につくものであるか否かという文脈で使用されていた。教科化を好ましくないとする理由づけにおいて「学校生活の中で自然に身につけて欲しいものだから」(高等学校教員・否定)などと使用される一方で、「日常生活を送る中で自然と身に付くはずの善悪の判断が身に付いていない人が多いので授業の中で取り入れていった方がよい」(保育者、肯定)のような意見も見られた。また、「道徳は普段の生活の中で身につくものなのではないかと思う反面、近年の家庭環境や教師のやらなければならないことの多様化について考えると、教科として基盤がつくれた方がいいのかとも思えるため、どちらとも言えない」(学生、中立)のような理由づけも見られた。

第3のクラスターは、「分かる」「必要」「教える」「子ども」「価値」「指導」「今」などのまとまりであつた。これらの語も、肯定・否定それぞれの理由づけで用いられていた。例えば、学生では、「価値観が多様化する現代において、社会的なルールや道徳性を学ば

せる機会を子どもに与えることは必要であると考える」(学生・肯定)という意見がある一方で、「道徳を教科としてしっかり子ども達に教えることは必要だと思うが、はたしてどの様に、どの様な方法でということが明確でないため」(学生・中立)という意見や「大人の価値観に子どもが縛られてしまいそうだから」(学生・否定)という意見も見られた。また、現職者においても、「教科として位置づければ国語や算数のように指導の統一化が図れるし、文科省から価値項目についての指導要領が出れば指導する側も資料にふりまわされることなく楽になるのではないだろうか」(小学校教員・肯定)と肯定的な意見がある一方で、「教科にしなくても今の道徳で十分なように思います。読み物などを通して価値について考えさせたり、道徳の時間だけではなく今も学校生活全体で指導する機会があったりするので教科にする意図がはっきり分かりません」(小学校教員・否定)のような記述も見られた。

第4のクラスターは、「考え」「自分」「好ましい」「授業」「時間」のまとまりであった。「今までのように道徳の時間を軽んじることなく、しっかりと授業時間を獲得できる点は好ましい」(学生・肯定)、「『評価』を付けるようなのであれば好ましくありませんが、自分の考えを表す機会として重要だと思います」(学生・中立)、「子どもが自分で正しいことを考え学習していくのなら好ましいが、大人から『これが正しい』と押し付けてはいけない」(学生・中立)のような意見もある一方で、「毎年の時間の確保はしっかり行われるかもしれない。しかし、評価を行わなければいけないのは賛成できない。教科化したからって、社会のモラルが良くなるとは思えない」(小学校教員・否定)のような意見も見られた。

第5のクラスターは、「評価」「教科化」「考える」「教科」「道徳」「思う」のまとまりであった。これらの語のうち特に「評価」に関してはネガティブな文脈で使われることが多かった。「現場では行事等に追われ道徳の時間をきちんと確保し充実したものになっていないこともあるので、しっかりと確保・確実に実施するという意味では良いと思う。しかし教科となると評価しなければならぬので好ましくないと思う。よってどちらとも言えない」(小学校教員・中立)のように中立の文脈で使われることもあるが、「教科化すると評価をしなければならぬときいた。担任が一人一

人の行動を全て見れるわけではないし、指導してすぐに変化が現れるわけでもない。長い目でその子が道徳性を身につけ成長していくのを見ていかなければならないと思うので、教科化には反対である」(小学校教員・反対)や「道徳を何らかの均一化された尺度で評価することはしてはならないと考えるからである」(学生・否定)など、教科化に伴う評価の導入についての否定的見解が多く示された。

②道徳に検定教科書を導入することについて ②道徳に検定教科書を導入することについて好ましいと思うか否かの理由づけに関する階層的クラスター分析の結果を Figure 2 に示す。個々のクラスターについて上から順に概観すると、第1のクラスターは、「教科」「必要」の語のまとまりであった。「教科」として授業を行うためには必要であり、目標が明確になると思う」(小学校教員・肯定)あるいは「教科として指導していくのであれば必要だが、どのような基準で選ぶのかよく分からない。しかし、保護者の経済的負担は減らせるから良い」(中学校教員・中立)など、これらの語は「教科にするなら必要」として検定教科書の導入を肯定する理由に使われる傾向にあった。

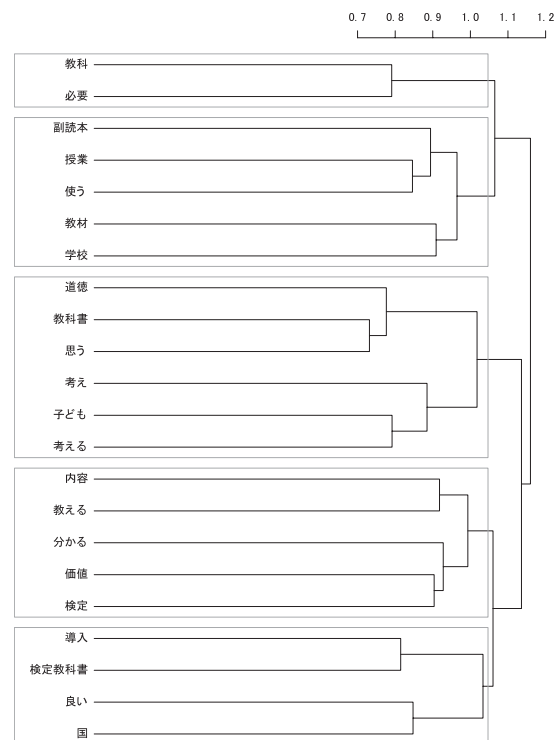


Figure 2 道徳に検定教科書を導入することについての階層的クラスター分析

第2のクラスターは「副読本」「授業」「使う」「教材」「学校」の語のまとまりであった。これらの語のうち、「副読本」については、検定教科書の導入を否定的にとらえる文脈で使われることが多かった。強い反対意見としては、「今の副読本でさえどうかと思うものがあるから使わないことも多い。そんなものを必ず使わされるのは困る。道徳教材の善し悪しも人それぞれの基準があるから押しつけられるのは嫌」(小学校教員・否定)、「現在の副読本でさえ実態に合わせて使用することに苦慮しているから」(中学校教員・否定)などの記述が見られた。また、強く拒否するわけではないが、選択の自由が制限されることを懸念する記述も見られた。例えば、「副読本でよい。学校の状況に合ったものが選べる」(中学校教員・否定)、「道徳の捉え方は人それぞれであり、使いたい教材を教師が自由に選べたほうがよいと思うから」(学生・中立)、「教科化することで教科書は必要になってきますが、これまでのように副読本以外から授業の中に取り入れたものができなくなるのではないかと思います」(小学校教員・中立)などがそれである。学生においても、「教科化して授業をするのであれば、教科書があった方が先生としては楽だろう。ただ、それで身になるのかは分からない。教科書を使わない授業の方が良いものであることが多かったので、あまり賛成できない」(学生・否定)などの記述があった。他方、「今使っている副読本とどう違うのかよくわからない」(小学校教員・中立)のでどちらとも言えないとする記述や、「現在は副読本として各学校裁量に任せられている状態なのでどれを使ったらいいか毎年悩まなくていい」(小学校教員・中立)、「副読本と文科省から配布されている『道徳〇〇年』が検定教科書一本になるなら『好ましい』と考える。教科書になることで指導しやすくなるようなイメージがある」(小学校教員・肯定)などの記述もあった。

第3のクラスターは、「道徳」「教科書」「思う」「考え」「子ども」「考える」の語のまとまりであった。「子どもたちの考えを幅広く集め共有するためにも教科書は不要だと思うから」(学生・否定)、「子どもたちが他者の考えや思いについて考えやすい場面があるのは考えやすいとは思いますが、教師がその教科書によって考えがしばられてしまうのはよくないと思う」(学生・肯定)などの記述があった。

第4のクラスターは、「内容」「教える」「分かる」「価値」「検定」の語のまとまりであった。これらの語のうち特に「検定」に関しては、どちらとも言えない(中立)という文脈で使われていた。「偏りのないバランスのとれた内容であるためには、検定でチェックする必要がある」(中学校教員・肯定)という意見もあったが、多くは「検定することで特定の価値などの上からの押しつけになってしまうのが心配」(中学校教員・中立)、「1つ基準になるものがあるのは悪くないと思う。ただ多様な価値観がある現代でだれの感性で検定をするのか分からないのは不安」(小学校教員・中立)、「何を基準として検定されるのか詳しく教えて欲しい」(小学校教員・中立)、「副読本と同じ内容ならばよいと思います。価値を教え込むような内容よりは考えさせる内容がよい」(小学校教員・中立)など、検定に関してどのように行われるか分からず何とも言えないという記述が多かった。

第5のクラスターは、「導入」「検定教科書」「良い」「国」の語のまとまりであった。「教科化となれば検定教科書の導入は必然」(中学校教員・中立)、「検定教科書を導入することで、国や各学校でも道徳について話し合われ、道徳についての考え方が成熟していくのではないか」(高等学校教員・肯定)、「検定教科書は厳選された良い教科書だと思う」(学生・肯定)など、導入を肯定する文脈で使用されることが多かった。

③道徳で評価を行うことについて ③道徳で評価を行うことについて好ましいと思うか否かの理由づけに関する階層的クラスター分析の結果を Figure 3 に示す。個々のクラスターについて上から順に概観すると、第1のクラスターは、「正解」「良い」「悪い」「考え」「自分」「教師」「分かる」「行う」「子ども」「考える」の語のまとまりであった。これらの語は、学生を中心に、評価に対してどちらかというとながティブな文脈で使われていた。「子どもが考えたことを素直に話せず、評価・まわりの目、先生の考えを気にしてしまう可能性が少なくない」(学生・否定)、「『良い・悪い』『正解・不正解』はつける必要がない」(学生・中立)、「評価を行うということは何が正解なのかを出してしまうということになるからよくない」(学生・否定)、「教師が評価するのは良いとは思わない」(小学校教員・否定)などの記述が見られた。

第2のクラスターは、「人間」「感じる」「心」の語

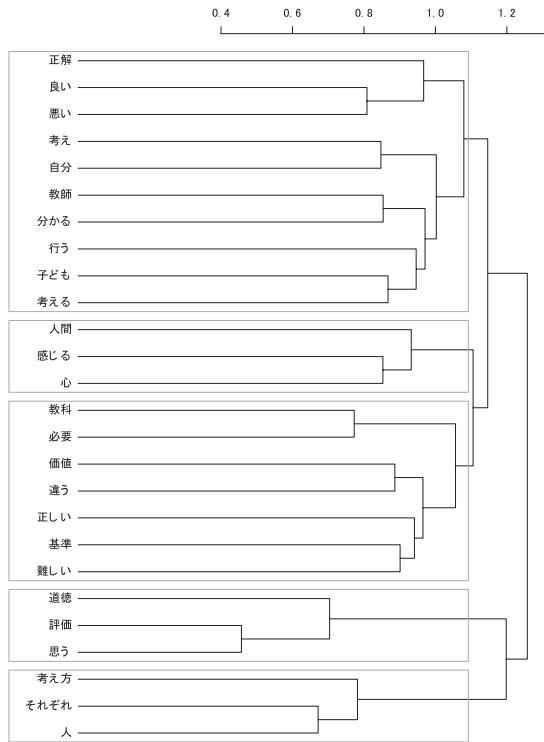


Figure 3 道徳で評価を行うことについての階層的クラスター分析

のまとまりであった。「その子の人間性を一部の人間が評価しているように感じて好ましくない」（学生・否定）、「人間性や心は評価できるものではないし、されるべきではない」（学生・否定）、「人間性を否定しているように感じる」（学生・否定）などの否定的な文脈で使われることが多かった。

第3のクラスターは、「教科」「必要」「価値」「違う」「正しい」「基準」「難しい」の語のまとまりであった。これらの語のうち「教科」と「必要」に関しては、「教科になると評価が必要になる」という文脈で用いられていた。具体的には、「心を評価するということには抵抗感がある。ただし教科化する以上は必要なものも分かる。ただ記述式の評価といわれても、あたりさわりのないものになりそう。」（小学校教員・中立）、「教科化されれば評価が必要になると思う。ただ、教科と違い、評価がとても難しいと思う」（中学校教員・中立）、「教科にする以上評価は必要になってしまうが、子どもの『人間性』や『人格』に評価を下すようで私には抵抗がある」（学生・反対）などの記述が見られた。また、その他の語については、「評価する基準が難しい」（保育者・中立）、「どの基準が正しいと誰が決めるものなのか」（保育者・中立）、「グローバル社会におい

て宗教によって価値観が違ったとき、どのような対応をするのか」（小学校教員・中立）など、どちらとも言えないという理由の中で使用されることが多かった。

第4のクラスターは「道徳」「評価」「思う」の語のまとまりであった。「道徳は評価は難しいと思う」（小学校教員・否定）、「子どもによって考えや感じ方は異なるし、大きく間違っていたとしてもその子を悪い評価にするのは道徳だと違うと思う」（学生・否定）、「評価するということは評価者の考え方が基準になってしまうと思う」（学生・否定）などの否定的な文脈で使われることが多かった。

第5のクラスターは、「考え方」「それぞれ」「人」の語のまとまりであった。特に学生において、「考え方は人それぞれである」（学生・中立）、「人それぞれに考え方があるのに、評価をつけるのは少し違う気がする」（学生・中立）などのどちらとも言えないとする理由づけにおいて使用されていた。

(3) 多重対応分析

KH Coder の対応分析のコマンド（抽出語を用いた対応分析を行い、その結果を2次元の散布図に示す）を用いて、抽出語×外部変数の多重対応分析（複数の変数を同じ分析の中を含めることで、抽出語とそれぞれの変数との関連を同時に探索したり、それを通じて、各変数間の関連を探ることができる）を行った（最小出現数は20に設定した）。なお、外部変数に設定したのは、先述の「回答者の立場」（学生、現職者）と「回答者の好ましさの選択」（肯定、中立、否定）であった。さらに、KH Coder のKWIC コンコーダンスのコマンドを用いて、これらの語がどのように用いられているのか文脈を探った結果を以下に記す。

①道徳の教科化について ①道徳の教科化について好ましいと思うか否かの理由づけに関する多重対応分析の結果を Figure 4 に示す。多重対応分析の結果について、やや解釈がしづらいが、強いて言えば第1軸が「回答者の好ましさの選択」（正が否定、負が肯定）を、第2軸が「回答者の立場」（正が学生、負が現職者）を弁別する次元と解釈できそうである。なお、①においては、回答者321名中、肯定が111名、中立が110名、否定が100名であった。

Figure 4 では、「否定」の近くに「評価」がプロット

されているのが特徴的である。階層的クラスター分析の第5のクラスター (Figure 1) において見られたように、評価の導入自体が道徳の教科化に対する否定的な見方につながっているものと見て取れる。他方、「肯定」の近くには「必要」「大切」の語の他に、「授業」と「時間」の語が比較的近くにプロットされている。授業時間の確保につながるということが、道徳の教科化を肯定するひとつの論拠となっていることが窺える。さらに、現職者の側には「指導」「難しい」「感じる」などの語がプロットされており、指導に難しさを感じることもまた、否定的な見方の一因となっていることが分かる。

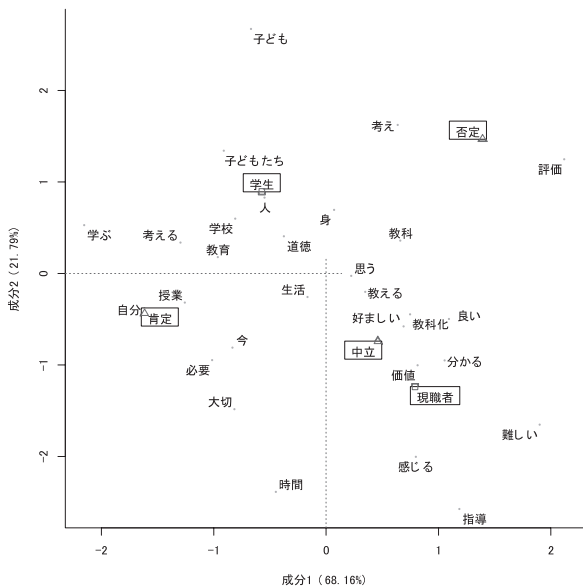


Figure 4 道徳の教科化についての多重対応分析

②道徳に検定教科書を導入することについて ②

道徳に検定教科書を導入することについて好ましいと思うか否かの理由づけに関する多重対応分析の結果を Figure 5 に示す。多重対応分析の結果について、こちらもやや解釈しづらいが、強いて言えば第1軸が「回答者の立場」(正が現職者、負が学生)を、第2軸が「回答者の好ましさの選択」(正が肯定、負が否定)を弁別する次元と解釈できそうである。対応分析では原点付近に特徴的でない一般的な語がプロットされる(石田, 2008) ことを踏まえ、否定では特徴的な語の使われ方がされていないと解釈できるかも知れない。なお、②においては、回答者321名中、肯定が75名、中立が158名、否定が88名であった。

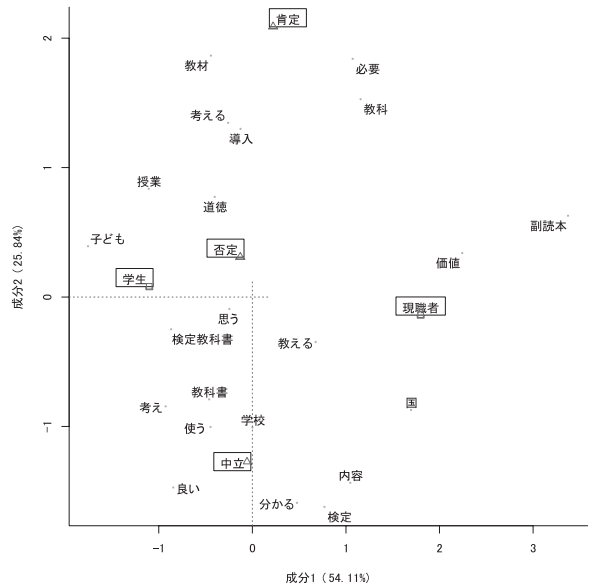


Figure 5 道徳に検定教科書を導入することについての多重対応分析

Figure 5 では、「肯定」の近くに「教科」「必要」がプロットされているのが特徴的である。階層的クラスター分析の第1クラスター (Figure 2) において見られたように、「教科化になれば必要になる」ということが検定教科書を導入することを肯定するひとつの論拠となっていることが窺える。また、「現職者」の側には「副読本」がプロットされている。階層的クラスター分析の第2クラスター (Figure 2) において見られたように、副読本やその他の教材を自由に選べた方が良いという理由から検定教科書の導入を好ましくないととらえる現職者がいる一方で、副読本を廃して検定教科書とすれば選択せずに済むのでよいという現職者もおり、多様な認識が示されていた。

③道徳で評価を行うことについて ③

道徳で評価を行うことについて好ましいと思うか否かの理由づけに関する多重対応分析の結果を Figure 6 に示す。多重対応分析の結果から、第1軸は「回答者の立場」(正が現職者、負が学生)を、第2軸は「回答者の好ましさの選択」(正が肯定、負が否定)を弁別する次元と解釈できそうである。なお、③においては、回答者321名中、肯定が15名、中立が79名、否定が227名であった。

Figure 6 でも、Figure 5 と同様に、「肯定」の近くに「教科」と「必要」の2語がプロットされているのが特徴的である。そもそも「肯定」と回答した者は少数派だが、評価の導入を肯定する理由づけは、Figure

3の第3クラスターにおいて見られたように、「教科化するなら評価が必要になる」というだけのものがあった。「これまでも指導してきたが、この道徳など特設扱いであった。指導と評価の一体化はそもそも必要であったと思う。これまでが曖昧であった。ただしどのように評価するのが難しいと思う」（小学校教員・肯定）のような肯定的な意見も見られたが、評価そのものに対して積極的な意義を見出した回答はほとんどなかった。また、回答者の立場による相違に関して、学生の側には「人」「それぞれ」「違う」「正解」などの語が、現職者の側には「難しい」「心」「評価」などの語がプロットされている。学生においては人それぞれ違って正解がないということが、現職者においては人の心进行评估すること自体の根源的な困難さが、道徳で評価を行うことを否定することの根拠となっているものと推察される。

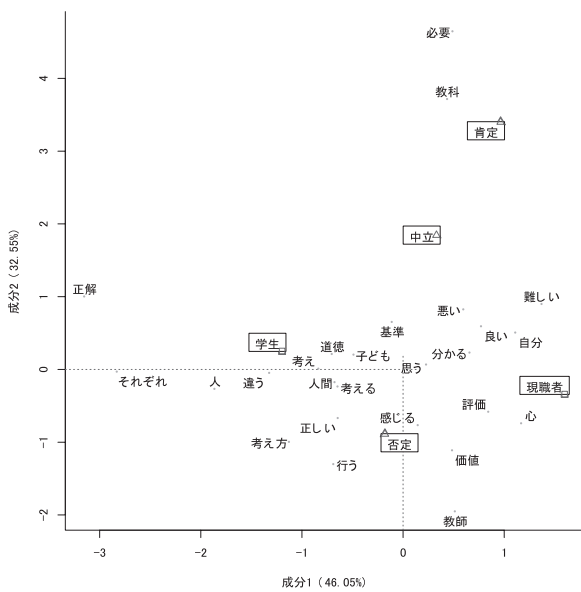


Figure 6 道徳で評価を行うことについての多重対応分析

4. 考察

本研究の目的は、現場の教師や将来教員を目指している学生たちが道徳の教科化を好ましいと感じているのか否かの理由づけをテキストマイニングにより分析することであった。前報では、教育学部生、保育者、小学校教員、中学校教員及び高等学校教員を対象として質問紙調査を実施し、①道徳の教科化、②道徳に検定教科書を導入すること、③道徳で評価を行うことの

それぞれについて、好ましいと思うか否かを尋ねた。本報では、前報で取り扱うことのできなかった理由づけの自由記述をテキストマイニングにより分析した。本報で示されたことは、主に以下の点である。

まず、道徳の教科化に関して、ネガティブな認識が示される要因のひとつが評価の導入であることが確認された。また、特に現職者においては、道徳について指導を行うこと自体の根源的な困難さから、教科化に対して懐疑的である面もあるものと考えられる。他方、道徳の教科化に対してポジティブな認識が示される理由は、主に授業時間の確保につながるということである。教育の内容そのものよりも、定められた通りに実施するというところに主眼があるようにも思われる。

次に、道徳に検定教科書を導入することについてポジティブな認識が示される背景にあるのは、「教科化になれば教科書が必要だから」という認識であることが示された。他方、ネガティブな意見の背景にあるのは、副読本やその他の教材を選択する自由が制限されることへの懸念である。しかしながら、副読本を廃して検定教科書とすれば自分で選択せずに済むのでよいと考える現職者もあり、認識は一様でないといえる。

最後に、道徳で評価を行うことに関しては大多数の学生・現職者がネガティブな認識を示しているが、「教科化するなら評価が必要になる」という消極的な理由から評価の導入を肯定する人々もいることが示された。他方、評価の導入に対するネガティブな認識の背景には、道徳について人それぞれ違って正解がないという認識（主に学生）や人の心进行评估することへの抵抗感（主に現職者に）があるものと推察された。教科化のための検定教科書導入、教科化のための評価といった認識が、道徳の教科化に対する抵抗感をさらに強めるひとつの要因となっている可能性が示唆された。

引用文献

- 越中 康治 (2016). 道徳の教科化に対する教師・保育者及び学生の認識 (1) 宮城教育大学紀要, 51, 印刷中.
- 樋口 耕一 (2004). テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合— 理論と方法, 19 (1), 101-115.
- 石田 基広 (2008). Rによるテキストマイニング入門 森北出版

付 記

本研究は JSPS 科研費15K17263の助成を受けた。

(平成28年 9月30日受理)